水産科学の分野で活躍する女性たち 16

Dynamic Women@Fisheries Science 16

県の水産試験場の研究員として

保 聖 子

鹿児島県水産技術開発センター

SEIKO TAMOTSU

*Kagoshima Prefecture Fisheries Technology and Development
Center Ibusuki, Kagoshima 891-0315, Japan*

「水産科学の分野で活躍する女性たち」の原稿依頼を頂いた時、最初は、自分自身が水産科学の分野で活躍していると言えるのか大きな疑問であった。しかし、私のように地方公設試験場で働く研究員の業務内容を多くの学会員に知って頂き、水産業を支える様々な研究機関があることを、研究員を志す若い方々に知ってもらい機会になればと思い、筆を執ることにした。また、私自身のこれまでの経験を伝えることで、仕事と家庭の両立で悩んでいる女性の方の一助になれば幸いである。まず、自身の経歴であるが、平成2年に鹿児島県に採用され、入庁から5年間、水産試験場で水産加工を担当する研究員として勤務した。その後、県庁と出先機関で行政と普及員を経験し、7年間のブランクを経て、再び、平成14年から現在に至るまで水産試験場で水産加工分野の研究員として勤務している。勤続23年間のうち、16年間同じ利用加工分野の研究員として働いている私は、県の水産試験場という組織ではとても恵まれている方だと思う。水産試験場における研究業務は、海洋資源分野、増養殖分野と利用加工分野に大きく分類される。県の研究員の場合、常に「県内の漁業生産者（または水産加工業者）のために」「経営改善及び水産振興に資すること」を意識して研究を行うことが求められる。具体的にどのような研究業務を行っているかという点、水産物の品質保持研究や付加価値向上に繋がる研究である。最近の研究例を挙げると、「イワシ丸干し製品におけるヒスタミン生成抑制技術開発」や「魚介類の出荷前蓄養の導入によるゴマサバの刺身商材化」等がある。前者では、ヒスタミン生成菌等微生物についての知識及び分析技術が、また、後者では、活魚の生理状態に関する生化学分析技術や刺身としての適正評価技術などが必要であり、利用加工全般に関する幅広い（決して深くはありません）知識が必要となる。また、このような研究以外にも漁業協同組合女性部や漁業生産者等を対象とした加工技術やそれに伴う衛生管理指導、さらには、水産加工業者等への技術移転を目的とした水産物の新製品開発も行っている。ここまで述べると、あれもこれもできるスペシャリストの様に思われるかもしれないが、実際は、そうではない。逼迫する県財政のもと、研究員の人員削減の中で成果が求められる。

短期間に成果の出ない事業や県民ニーズに即さない事業は削減の対象となる。このような社会的事情により、利用加工全般に精通して業務をこなす、また、競争的資金を獲得して研究費を潤すことができるような専門性を持ち続ける努力も要求されるのである。しかし、難儀が多い程、喜びや満足感も大きい。仮説を裏付ける研究データが得られた時や、想定外の結果から新しい展開が生まれた時、また研究成果が水産加工業者へ技術移転された時など、やりがいと充足感を覚える。特に県の研究機関の場合、研究成果により喜ぶ生産者の顔が直接見えることも多く、誰かの役に立てたという思いが、やる気に繋がるのだと思う。このような私が、自分なりに仕事に充実感を感じられるようになったのは、ほんの数年前からである。入庁当時の私は、既に家庭を持っており、最初の5年間の研究員時代に子どもを2人授かった。その当時は、研究課題も任されておらず、他の研究員の分析サポートが主な、いわゆる下積み時代であった。第1子の時は、自分の子どもを0歳児託児所に預けながら働く日々であったため、子どもを犠牲にしてまで、果たして自分はこの職場に必要な人材なのか？と自問自答を続けていた。そんなある日、「仕事を辞めたい」と夫に相談した。その時の夫の返事はこうである。「辞めたいのなら、いつでも辞めていい。ただし、子どものためというのは辞める理由にすべきではない。母親が自分のために専門職を辞めたと知ったら、その子は一生、罪悪感を持つかもしれない。子どもに失礼だ。自分自身の能力不足が理由ならいつでも辞めなさい」と。言い返す言葉はなかった。要するに自分の逃げ道を探していただけたと、気付かされた。元来の負けず嫌いの私の性格を見越しての夫の言葉だったのかもしれないが、以来、一度も辞めたいと思ったことはない。あの時踏ん張ったお陰で、大学生と大学受験を控えた子ども達が、将来は、科学者になりたいと、分野は違っても理系の大学に進学し（1人は進学予定）、研究論文作成時など意見やアドバイスをくれるようにまで成長した。ここまで書いて気付いた、水産科学の分野で女性がかっこよく活躍する未来を作るためには、我々女性の頑張ってきた証を後輩に残すことだと。最後に、あの下積み時代に様々な分野の分析技術を習得させて頂いたことは、今では貴重な財産となっている。無駄な経験なんて一つもないのだと思う。ここまで頑張っているのは、家族の支えだけではない。数少ない女性職員を男女の差別無く対等に、暖かく指導して下さる諸先輩方、そして、小柄な体型による体力的に困難な部分を、優しくカバーして下さる鹿児島県水産技師の上司、同僚の皆様のお陰である。この場を借りて、感謝申し上げますとともに、今後ともご指導ご鞭撻のほど重ねてお願い申し上げます。